氏　　名	：	北川　公美子
専攻分野の名称	：	博士（教育学）
学 位 記 番 号	：	博乙第１０７号
学位授与年月日	：	令和３年３月１６日
学位授与の要件	：	学位規則第４条第２項該当　論文博士
学 位 論 文 名	：	明治期の幼稚園教育における「童話」の研究－小学校教育・児童文学の関係から探る－
論文審査委員	：	（主査）　教授　佐藤　宗子 （副査）　教授　寺井　正憲　　教授　石井　正己 教授　砂上　史子　　教授　一柳　廣孝

学 位 論 文 要 旨

日本の幼稚園教育の歴史の中で、童話との関係は深く、その初期から「談話・説話」の保育項目の中で取り上げられ、現在でも保育の教材として重要な役割を担っている。そのような童話が、幼稚園教育の黎明期である明治期において、どのように保育の中へ導入され受容されてきたのかを明らかにすることによって、日本における保育内容成立過程の一端を解き明かすことができる。

あらゆる分野において西洋の影響を強く受け、近代化が推し進められた激動の明治期の中で、近代的教育制度が確立し、新たに幼稚園教育という幼児を公的に教育するという体制が誕生した。その一方で童話においても、それまで伝承的に受け継がれてきた日本の童話と異なる西洋童話が、日本に移入され、受容され、普及していった。本研究においては、この新しく確立された近代的教育制度と、童話という新たな文化移入という動きを同時に捉え、「小学校教育」及び「児童文学」との関係性に着目しながら、明治期の幼稚園教育における童話受容の構造と実態について考察を行った。そして、以下の３点を実証的に明らかにした。

第一は、明治期の幼稚園教育の童話は、小学校教育と密接なかかわりの中で展開されていたということである。これまで明治期の教育については、小学校と幼稚園、それぞれの立場から研究が進められてきたが、小学校教育と幼稚園教育が明確なつながりを持って展開されていたことについては、ほとんど目を向けられていなかった。しかし、幼稚園教育は当時の近代的教育システムの根幹となる小学校教育との「宿借り」的なかかわりを保つことによって、その存在が保障されていたのである。幼稚園教育の保育内容は、その小学校における教育内容の影響を強く受けた形で変化し、それをとおして、小学校側に、幼稚園教育の成果・効果を発信し、幼稚園教育の存在意義を認めさせようとしたのである。

また、このような関係性が、幼稚園教育に教材としての童話を導入することにもつながり、その教育的役割についても、小学校教育における教育的価値の動向を意識した中で確立されていった。修身重視の傾向にあった当時の教育界にヘルバルト派教育学が導入され、教材としてグリム童話が提示されたことにより、教材としての童話が定着し、また童話の教育目的として「美感の形成」が求められるようになった。この影響を直接的に受けた幼稚園教育でも、保育項目「談話」

の中でグリムやアンデルセンなどの西洋童話を含めた童話が取り上げられ、その教育的価値として「修身的教訓性」以上に「美感の形成」を求めようとする動きが起こり、両者の間で対立や共存、融和・同化という様相が見られるようになっていく。

第二は、明治期に日本に芽生えた「児童文学」という存在意義には、近代的教育制度によって確立した教育界と深くかかわっていたことである。明治期にはまだ「児童文学」という用語が生まれていなかったが、先に学校という枠組みが作られた教育界の影響を受け、教育を受ける「子ども」という存在が意識されたことによって、日本における児童文学は、西洋のそれとは異なる形でスタートすることとなった。教育と結びついた「子ども」という読者を対象として誕生した児童文学は、文学的価値を追究することが困難であり、また、一般の文学よりも社会的な評価は低くかった。そのような状況の中で、児童文学がその存在を確立できたのは、ヘルバルト派教育学導入による教材としての童話の定着という教育界との相乗的な動きがあったからである。同教育学により童話の教育的役割が明確化され、その教育思想・教育方法は、教員養成機関である師範学校をとおして教員を目指す学生に教授され、教員となった彼等はそれを実践していった。同教育学が流行する教育界においてその教材としてグリム童話が活用されると、童話そのものに目が向けられるようになり、結果として、児童文学としての受容も広がり、普及を促進することとなったのである。

第三は、上記のような「幼稚園教育と小学校教育」および「教育と児童文学」の密接なつながりが、明治期の幼稚園教育における童話の導入・展開の受け皿と促進剤の役割を果たしたということである。明治期の幼稚園教育が小学校教育との緊密な関係性のもとでその存在が保障され、その関係性ゆえに小学校教育で起こったヘルバルト派教育学の影響を、幼稚園教育も受けることになったのである。幼小の教育現場に導入された童話は、そこで推奨されたグリムやアンデルセンを含めた「童話」という存在を、日本に普及させる基盤・原動力になった。このような教育界の周辺の動きも誘発しつつ、幼小において童話を教育的な視点から導入したことによって、教育的内容の共有化にもつながっていったのである。

本論においては、このような複数の力学によって引き起こされた構造の中で、明治期の幼稚園教育における童話が導入され展開されていったことを明らかにした。